初陣の章

裏切り者たちの初陣

フリーペーパーの広告とは〈情報〉であると同時に〈発行サポーター〉としての側面を併せ持つ。よって何はともあれ広告契約の獲得だった。しかし営業経験を積んだベテラン勢はエルフ側に留まり、ガリヤ側には私と村山さん（ガリヤ二代目編集長）オンリー。他は入社間もないヒヨコたち&プランナー&デザイナー&事務職だ。

そこで作戦。

――アポイントを取ってきて下さい！クロージングには私たちが同行します！――

すると早速、香川さんが取って来た。

「ジャンプハウスさんが『一時だったら会いましょう』と言ってくれました！」

中洲に今もある老舗ジャズバーである。

それにしても午後じゃなく午前の一時だ。ウラ若き女性がそんな時間外労働にも嬉々としていたのだから就労法もヘッタクレも無いというアキレた無法地帯だった。

さて、深夜1時きっかりドアを開けると、

「あ、ガリヤさんが来ましたよ」

この声に呼応し、ボックスシートからスッと若い男性が立ち上がった。そして罵声を浴びせた。

「お～たくの～仕事なんかあ～出～来るわけ～ないじゃあないですかあ～っ！」

D日本印刷の面々である。

あっけにとられる私たちを店の方が申し訳なさそうに隅に呼び寄せ事なきを得たのだが…こうした

対応にはもう慣れっこだった。
印刷会社のみならず、外注先からはことごとく断られていた。親しく付き合っていたはずの業者さんでさえ、
「ガリヤの仕事をしたら西広に出入り禁止になるって、皆んな怖がってるんです…」
当の西広さんが聞いても苦笑だったろう。

元凶はおそらく、広告主や関係者たちに届いた新年早々の［挨拶状］だ。内容をかいつまむと次のようなものだった。
○長澤が会社を裏切り、二〜三名のスタッフを引き連れてエルフを飛び出した。
○新しい情報誌の発行を画策しているようだが、相手にしないように。
そして文末は、
○西広・西日本新聞・TNC、3社が総力をあげこれまで以上のエルフを発行します。乞うご期待！
…と、他社まで巻き込んでメていた。ただ、
――二〜三名じゃなくて、十一名なんだけどなあ…――
…と、私たちにはこれがいちばん気になった。たぶん入社したてということでカウントの対象から外されてしまったのだろうが、それこそ失礼の極みである。

とにもかくにもガリヤの初陣は、〈長年お世話になった会社を裏切った恩知らずで世間知らずでバカ女集団〉という絵に描いたようなヒール役だった。

塩をまかれて運気アップ

この頃のエピソードにはこと欠かない。たとえば或る夕刻、営業から帰るや肩を寄せ合い何やらヒソヒソ話…。

――どうしたの貴女たち？――

「あ…だいじょうぶです…」

言いたくなさそうだったから、突っ込んだ。

――ウソ、何かあったんでしょ？――

「たいしたことじゃありませんから」

――だから、何があったの？私にも聞かせて、聞かせて、聞かせてっ！――

「たいしたことじゃありませんから」

――聞かせなさい！――

そこでポツリと村田さん。

「…塩…まかれちゃいました…」

――シオ？――

『ごめんくださいガリヤです』って入ったんですよね…そしたら奥から店の人が出てこられて、私たちにパッパッって…ま、いいんですけどね…」

――塩を撒かれたのは…初めてですか？――

「いいえ…ま、いいんですけど…気になさらないでください！」
…といつものくったくない笑顔を向けてくれた。つられて私も笑った。

ものは考えよう、塩なんか撒かれてたって痛くも痒くも無い。むしろお清めになって運気アップじゃないか。しかし、笑って済むことは笑い飛ばしたが、済まないこともあった。
たとえば〈リバーサライト不売事件〉…いくら何でも、ああいうのはヤリスギだ。

リバーサライト不売事件

「そろそろリバーサライトを買いに行きたいんですが…よろしいでしょうか？」
今や過去の遺物となったリバーサライトだが、当時の私たちには必需品だった。
――よろしいですよ。ハイ、９万円で足りますよね？――
「ありがとうございます！では行ってきま～す！」
…と元気に出かけた清子さんだったが、ベソをかいて戻って来た。
――どうしたの清子さん？リバーサライトは？――
「ヒッ…ヒッ…」
――あれぇ…清子さんったら、どうしちゃったのかなぁ？――
「ヒッ…ヒッ…」
ひとしきり泣いて報告タイムに移った。
『あんたんとこには売れん！』って、売ってもらえませんでした！『売ってください売ってください』って何度もお願いしたのに『ぜったい売れない』って言うんです！リバーサライトが無いと私たち制作ができません！ガリヤが発行ができません！」
まさかの珍事である。
――…わかりました。なら他の店に買いに行ってください！――
「ダメです！」
――どうしてダメ？――

「福岡でリバーサライトを取り扱っている店はIやさんだけです！」
――じゃいちばん近い取り扱い店に行きましょうよ！久留米は？…北九州は？…佐賀は？――
「東京のメーカーから直接取り寄せるのがいちばん確実だと思います」
――東京ですね！では直ぐ発注してください！――
ところが数分後、
「急いでも最短で10日はかかるそうです…」
――10日も…それでは発行に間に合いません！――
〈リバーサライト不売事件〉の幕は、こうして上がった。

今はパソコンに写真データをチャチャッと取り込み、拡大・縮小・トリミングなど自由自在の時代だが、当時はそうはいかない。
〈ポジフィルム（印刷目的に使用されるフィルム）を光に透かし使用範囲を決定〉→〈使用範囲を採寸〉→〈デザイン画と同寸になるよう倍率を算出〉→〈コピー機に出力倍率をセット〉→〈原稿台にポジフィルムをセット〉→〈コピーボタンを押す〉→〈画像出力〉
…という流れだが、なにしろ透き通ったフィルムのこと、まんまコピーすれば真っ黒け。そこでリバーサライトの出番となる。
〈原稿台にポジフィルムをセット〉→〈ポジフィルムをリバーサライトで覆う〉→〈コピーボタンを押す〉→〈コピー機の発光に連動してリバーサライトが発光〉→〈画像出力〉。
…となるわけだが、それからの作業もオオゴトだった。出力画像から必要部分を切り抜きノリで版下

の指定位置にペタペタ貼り付ける。それが様々な提案稿となり修正稿となり決定稿となってめでたく印刷所社への入稿となるわけだが…なんともご苦労な時代ではあった。

清子式リバーサライト

リバーサライトが無ければ制作が止まる。そのことでもたらされる損失の大きさに呆然としながらも、何とか方策はないものかと、狭いオフィスはざわめいていた。

やがて声が上がった。さっきまでベソをかいていた清子さんだ。

「私に考えがあります！私が戻るまで、ちょっと待っててください！」

そう言うと、また外に飛び出して行った。

二時間ほどしてドアが開いた。抱えた段ボールをヨイショと卸すなり、その手を拡声器に変えてアナウンスした。

「こ…これからあッ…リバーサライトのッ……代用品をッ…作り、まあ～す！」

息があがっていた。

それにしてもリバーサライトといえば当時のハイテクマシーンだ。

――代用品を作る！？――

段ボール箱に目をやると、裸電球、アルミ傘、幾重にも巻いた電気コード…一見ガラクタ、二見もガラクタ…いったいどこから拾ってきた？

清子さんは黙々と作業に取りかかった。その静寂の中で電器コードだけが、バタッバタッバタッ…と音をたて、生き物ようにうねっていた。

完成した代用品はと見ると、電気スタンドからスタンドを外したような形状である。ただ発光源つまりアルミ傘の開口面は、トレーシングペーパーによって丁寧に被われていた。

「これからテストをしま～す！使い方はリバーサライトと一緒で～す！光はこのスイッチで調整しま～す！」

しかし、こんなものがほんとうに機能するんだろうか…そんな空気を察してか、彼女はいっそう語気を強めた。

「原理は同じですから、できるはずです！ではテストします！」

原稿台にポジフィルムをセットし、アルミ傘をパカッと被せ、コピーボタンを押し、続いて電球のスイッチをオン…一同、固唾を呑んで見守る中での出力だったが…マックロケ。

「もう1回やりま～す！」

この代用品に唯一欠けるのはコピー機との連動だった。それを手動で行うわけだが、点滅のタイミングが微妙なことから多少の慣れが必要だった…で、マックロケ。

「もう1回やりま～す！」

三度目、ついに画像が浮き上がった！鮮明さには欠けるが当面の作業には申し分ナシと判り、

「キャ～ッ！清子さん凄い～ッ！」

狭い室内に黄色い歓声が渦巻いた。

創刊号に掲載された写真を数えるとなんと５３０枚。代用品とはいえどれほどの活躍を見せたかがうかがい知れる。しかし、その裏でどれほどの危険を孕んでいたかについては、誰も予想だにしなかった。

あわや大惨事

入稿を間近に控えた深夜だった。

「お疲れさま〜」

「お先に帰りま〜す」

そんな声が途絶えて小一時間は経っていたが、まだ帰ろうとしない者がいた。置いて帰るわけにもいかず居残っていたが、もう限界。

――清子さん！3時だよ、そろそろ帰ろうか？――

「そうですね、帰りましょっ！」

…と、やっと表に連れ出したところで、

「ちょっと待ってください、隣の部屋を見てきますから」

――隣は皆んな帰ったよ――

「そうなんですが…」

――早く帰ろうよ！――

「でも…やっぱり、ちょっと気になるので」

――何が気になるの？――

「いや…ちょっと」

――皆んなとっくに帰ったよ、ほら鍵がかかってるでしょ――

それでも清子さんはドアを開けると、ジ～ッと目をこらし続けた。机も椅子も書籍類もコピー機も、漆黒の闇の中に溶け込んでいた。

「ほら問題無いでしょ、帰りましょ！」

それでも動こうとしない。

――早く帰ろうよ、明日も早いんだから――

「ちょ…ちょっと…待ってください」

そう言って部屋の中央に駆け寄ると…パア～ッ…閃光が一瞬にして漆黒の闇を吹飛ばした。

あらんことか代用品がオンの状態で畳に伏せられていた。つまり点けっぱなしのアイロンを畳に放置した状態である。トレーシングペーパーは灰と化し、畳にはアルミ傘と同直径の丸い黒焦げ…発火はまさに、秒読み段階にあった。

原因は不注意だ。奪い合うようにスイッチオン⇅オフを繰り返して生じたケアレスミスである。

「一瞬、畳に赤い筋が見えた気がしたんですよ」

清子さんはサラッと言ったが、私は震えが止まなかった。多くの居住者が爆睡中のビル・アパートだ。この夜、オフィスに最後に残った者がもし清子さんでなかったら…。

彼女の注意深さと繊細さに、救われた。

ガリヤ創刊の朝

１９９０年2月２４日、ついにガリヤが創刊された。エルフ新年号、つまりエルフにおける最後の発刊からわずか一ヶ月と二週間というスピード創刊だった。

私たちはその朝、赤いトレーナーを着て天神に立った。背中にGariyaのロゴマーク。ラジカセから流れる［ガリヤの歌］。

ガリヤ♫ガリヤ♪ガリヤ♪ガリヤ♬…

サビ部分しか覚えていないが…名曲というより迷曲…しかしそれをＢＧＭに臆することなく、

「ガリヤで〜す！創刊しました〜！」

出社を急ぐ人々に手渡した。

ところでこの曲、作詞・作曲・演奏・ヴォーカル・ミキシング・ダビングのすべてが清澄淳子さん（ガリヤ三代目編集長）の自前である。頼まれもしないのに徹夜で仕上げてきた。チョット前までの勤務先は故郷の楽器店…ナルホドだった。

こんなふうに店員さんだったり教師だったり建築士だったり歯科衛生士だったり…とたいていが異業種からの転職者だったが、未熟なりにも出来ることを見つけて精一杯やった。未熟さを言い訳に勤務時間を浪費するようなフトドキモノはいなかった。常に考え常に動いていた。

創刊号の発刊から、広告営業が楽になった。エルフでは二月号が発刊されず、ひと月トンで合併号

となっていたことも追い風となった。

エルフを追われたことで「積み上げてきた財産を失った」と感じたが、これは早トチリ。積み上げてきたのは経験であり、経験こそ財産と、思い知った。ふと足元を見た。十センチあったはずのヒールが三センチのローヒールになっていた。

愛人疑惑

しかし、創刊したことでようやく認知されたとの思いは甘かった。

「編集長…電話、代わって頂けませんか？」

受話器を押さえて、野村さんが困った表情を向けた。

――どうしたの？――

「…遠方なので資料だけでも送らせて頂こうと思ってお電話を入れたんですが、何か…わけのわからないことを言われるので…すみませんが…」

――何っておっしゃってるの？――

「いえ…とにかく…すみません…代わって下さい…」

すでに手狭を極めていたオフィスは少しの移動もままならない。這うようにして壁を伝い、受話器を受けとった。

――お待たせしました長澤です。何か不都合なことでもございましたか？――

「あ～あんたね、あんたが長澤さんね」

――私が…何か？――

「あんた、ようやるよねえ、愛人に金ば出させてそげなことばしよってねえ！よかねえ！うらやましかぁ」

思いもよらぬ無作法の急襲である。不覚にも反撃に手間取った。

――バカ言わないでください！そんなことしてません！――

切り返したがカスリさえしない。

「あんたねえ、恥ば知らないかんよ恥ば！あんた、愛人にいったい、幾ら貢がせたとね？」
――そんなことしてません！――
「やっぱ女の人はよかよねえ！色気で男はどげんでもなるもんねえ！」
声の主は郊外で旅館業を営む方だったが、〈愛人に貢がせたお金でガリヤ創業〉との噂はこの時を境に方々で耳にするようになった。

エピソード1

スキャンダラスな話は尾ひれ胸びれをつけて拡散する。
「社長さん、あんた、愛人が三人おるってねえ」
たちまち2名の増員だ。
ヒトリの資金力ではとうてい持たないと思われたのだろうが、それにしてもネット顔負けの拡散スピードだった。
そこで広告原稿の打合せがてら、聖不動院の藤原院主（故）に相談…というか愚痴った。カリスマ鑑定士さんにタダで良策を頂こうという魂胆だ。
――ガリヤは私が愛人にお金を出させて創業した会社という噂が広まっているんですが……――
「まさか！それは長澤さんのこと知らなすぎますねえ。気にしなさんな！」
一笑に付されてしまった。
ところがそれから一ヶ月ほど経つと、

「いやあびっくりしましたよ！昨日ですね、久しぶりに天神のジャン荘でマージャンしたんですよ。ガリヤの長澤さんの愛人の話でもちきりでしたもんね！」
と、今度は大爆笑である。
しかしこの噂、ジャン荘にまで広がっていたとは…。

エピソード2

気の許せる友人にはもちろんグチった。たとえば市役所に勤務する友人S子さんだ。
「まあ…そうなの…あり得ないことなのにねえ…」
さしたるリアクションは無かったものの、親身に耳を傾けてくれたことが慰めになった。ところが何日かして電話が入った。
「びっくりしたわ！昨日友だちと食事をしたのよ。ガリヤの話になったから『ガリヤの長澤さんは私の友だちよ』って言ったら、『いいわね～、あの人は愛人からお金出してもらって会社してるんでしょ』って言ったのよ！」
なんと、友だちの友だちにまで広がっていた。

エピソード3

結婚やら出産やら留学やら独立やら転職やらで創業社員の多くが去ったガリヤは、二年も経つと早

くも創業時を知らない新人たちに代替わりしていた。これはそんな新人を伴って顧客挨拶に出向いた時の話である。

「そう言えば…社長さんには愛人が三人おるらしいね」

――おりませんよ。私には夫（猫ですが）も子供も（猫ですが）おりますし！――

慣れっこにはなっていたもののこの時ばかりはうろたえた。夢いっぱいでガリヤに入社した社員たちには、絶対に聞かせたくない言葉だったからだ。

ところが帰り道での私のうろたえ様ときたら、その一万倍だった。

――あんなこと言われて、びっくりしたでしょ？――

こうフォローすると、

「だいじょうぶですよ。よく言われてますから」

――よく言われてるぅ？！――

「はい」

ますますフォローの必要性を感じてこう尋ねた。

――…そうでしたか…ショックだったでしょうね…――

「いいえ」

平然と聞き流された。

――で貴女はその時、どんな言葉で否定してきたの？――

「いいえ」

――「いいえ」…って…貴女、否定しなかったの？――

「はい」
――どうして！？――
「そんなこともありかな～と思ってましたから」
――（絶句）…――
こともあろうに、なんとガリヤ社内にまで広がっていた。
以来、新人研修には必ず〈ガリヤは愛人の援助で出来た会社にあらず〉のレクチャーが加わった。

エピソード4

スキャンダルの寿命はけっこう長い。〈人の噂も七十五日〉とは言うが、これは単に口にのぼらなくなる期間だ。記憶の淵で呼吸を続けて出口と見るや飛び出してくる。

「昨日ですね～、久しぶりに営業に伺った先で『てっしいさんとおたくの社長、最近どうなんですか？』って訊かれましたよ」
ちなみに〈てっしいさん〉とは、当時飛ぶ鳥を落とす勢いにあった飲食店グループの社長さんだ。〈てっしい村〉の社名で日本浪漫座・ぶあいそグループ・丸海屋グループ・黒潮丸グループ・花ジャムグループ・村さ来祭本舗などの大型店舗を次々と展開して、福岡の飲食文化を牽引したいわば伝説のおじさんである。彼の顔がプリントされた〈てつおじさんのチーズケーキ〉は今も多くのファンを持つ。

――で綿谷さん、どう答えたんですか？――

「…いいえ…特には…」

――どうして！？なぜ否定してくれなかったの？！――

「…あ～ら社長！私たちくらいの歳になって、ま～だそういう色っぽい噂をしてもらえるのって、嬉しいじゃないですかあ」

――嬉しくないです！――

「そうですかあ～私、ウラヤマシイですよ～」

――だったらお願い！せめて好みのタイプにしてっ！――

ま、アチラ様もそう思ってらっしゃるだろうけど。

創業資金について

以下はこの根も葉も無い噂が、どうして生まれ育ったかの考察だ。

〈世話になった会社を裏切った恩知らずなバカ女たち〉→〈バカ女たちに創業できるはずがない〉→〈ところが創業〉→〈男の出資者がいる〉→〈出資者は愛人〉→〈男を手玉に取る悪女〉…の構図だろう。

しかしこんな安っぽい流言飛語を世間はどうしてマに受けるんだろう？そもそもいったい一面識も無い人間のことを、どうしてそこまで攻撃できるんだろう…中世ヨーロッパとかでなくてよかったとつくづく思う。もしそんな世界に生まれていたら、たぶん魔女狩りされて市中引き回しのうえ火炙りの刑だった。

ただ、ガリヤ創業にはやはりお金が要った。膨大な印刷費・配送費、そこに十二名（退職者が一人戻った）の給料だ。

つまり株式会社ガリヤの資本金一千万円はいったいどこから降ってきたかである。出資者が居たと考えるほうがむしろ自然かもしれない。だから少し長くなるが、その話もしておこう。

カーニバルクラブに入り浸りました

〈カーニバルクラブ〉…オールディーズのライブと飲食がウリの懐かしい店だ。ガリヤ創業資金のルーツは、実はこの店にあった。

店のオープンを知ってオーナーにアタックした。オーナーとは先述のてっしさんだ。
「店が終わるまで時間がとれません」
――では、店が終わったらうかがいます、閉店は何時ですか？――
「三時です」
常識的には不可能タイムだが、ここで引いたら次は無い。
「…では、三時にうかがいます」
ところが敵もさるものだった。
「僕は忙しくて何度も会う時間ありませんから、来られるなら企画も一緒に持って来てくださいね」
――…はい――
とは言ったものの企画の準備まであるはずナシ。アイデアだけなら何とでもなるがプレゼンとなれば別ものだ。しかもすでに6時過ぎ、デザイナーたちは帰宅の途についていた。

ーモシモシ清子さん？てっしいさんとやっとアポがとれたのよー今夜三時にカーニバルクラブに提案を持ち込むんだけど、これから私のアパートに来てくれる？」
「よかったですねえ！直ぐうかがいます」
なんとも気持ちの良いふたつ返事だった。私たちはその夜コタツの中で、ガールズトークに興じながらもプレゼン制作に気合が入った。

外に出ると一面の雪だった。足を滑らせながら中洲に辿り着いた。付け焼き刃的なプレゼンではあっ

たがその日、（株）てっしい村のレギュラー出稿がスタートした。

以來、清子さんと私は三日と空けずカーニバルクラブに入り浸った。二人とも実はオールディーズ、つまり６０年代サウンド大好き人間。そして佐賀からの出稼ぎバンド、［木原慶吾＆スピリッツ］に入れ込んだ。

船津弘子さんの記憶

ここでは船津弘子さん（故）の存在も欠かせない。今でこそあたりまえとなった［女性たちが夜遅くまで安心して楽しめる飲食店］を福岡で初めて実現した女性である。

それにしても、ちろりん村、ペペチーノ、美食歩、カレーの二重丸…と様々な店を展開していく中で、金龍のオープンは鮮烈だった。いずこもオープン初日は幹部たちの集合場所となるものだが、なんと前夫、現夫、愛人がトリオで集合し、それぞれのパートで黙々と役割を果たしている！

善し悪しはともかくとしても、これほど罪深くも面倒かつシンドイことを堂々とやりこなす女性というのをハチの世界でしか知らなかった私は、息を呑んで感服した。

もちろん相応の苦悩はあったのだが…生前彼女は、よくこう言っていた。

「長澤ちゃん、いつか私のことば書いて！私のごた生き方しようとは二人とおらんと思うよ！」

よってこれはほんのサワリ。アッチの世界では今ごろ、

「このくらいの書き方じゃ足りんよ！」

きっとおかんむりだ。

日本人離れした顔立ちに透明感を持った肌。華奢な四肢に似合わぬ巨大なおっぱい。しかも危ういほどに正直者で、子供のように好奇心に溢れ、女王様のように誇り高く、そして…優し過ぎた。

赤貧生活突入

カーニバルクラブに話を戻そう。スピリッツの木原リーダーが私たちに気付いて挨拶した。しかし胃に手をあてている。たったそれだけの異変であっても、船津弘子さんは見逃さなかった。

「木原ちゃん、今日はえらい元気なかよ、どげんかしたと？具合でも悪かっちゃろ？」

「…はい…」

「何かあったと？」

「…実は…」

「なんね？言うてごらん！」

「…実は…5百万の手形が落ちなくて…会社が倒産しそうなんです…」

バンドはあくまで副業。正業はサウンドスピリッツという音響＆イベントの会社であり、木原さんはそこの社長さんでもあった。

船津弘子さんが私に耳打ちした。

「『私が5百万貸すけん心配せんどき！』って、木原ちゃんに言うてきて！」

――えっ？！ありがとうございます！――
バックステージに駆け込み、そのままの言葉を伝達した。ところが席に戻るや災難勃発！
「よかね長澤ちゃん。木原ちゃんに貸すっちゃなかっちゃけんね。長澤ちゃんに貸すっちゃけんね」
――…ど…どういうこと…でしょうか…？――
「木原ちゃんは長澤ちゃんのカレシやろが？やけん長澤ちゃんに貸すと」
なんたる早トチリ！現実との一線を引いてこそのファンである。しかもサウンドのファンである。そのクリアなラインがモテ過ぎ女ゆえか見えなかった。
――カレシじゃありません！単なるファンです！木原さんには素敵な奥さんいるし！可愛いお子さん二人いるし！私はただのファン！それだけです！――
すると、
「つまらんね～。なら貸せんね～。長澤ちゃんのカレシやけん貸そうて思うたっちゃけん」
――そっ…そんな…もう…言っちゃいましたよ…もう…喜ばせちゃいましたよ…――
「カレシやなかったとね～つらまんね～貸せんね～」

ステージが始まった。危機を乗り越えたという彼らの思い込みは、演奏をいっそうパワフルなものにしていた。後には引けない…。
――お願いします！その5百万、私に貸してください。一年で必ず返します！――
「わかった！貸す！」
ソレからの一年、この天災とも思えるようななりゆきによって可処分所得の全てが返済に回った。

おかげで宵越しの金は持たないという呆れた金銭感覚は一変し、赤貧を絵に描いた暮らし向きとなった。

「ごめんね～、私があげなこと言うたばっかりに、あんた洋服も買えんっちゃろ？」

――…はい…――

彼女から譲られたブランドファッションのお下がりは、形見となって今もクローゼットに眠っている。

まるで無関係のような出来事が…

返済の一年が終わってびっくりした。

――どうして、お金が貯まるんだろ？！――

不思議で不思議で、ほんとうに不思議でたまらなかった。給料が右肩上がりという時期的な要因もあったにせよ、それだけではない。赤貧暮らしに馴染みすぎたのだ。

そんなりゆきから二十五年ローンでマンションを購入した。それでも一度患った貧乏性は治癒することなく、預金額は増える一方だった。

そしてガリヤを叩き出された１９８９年１２月末、つまり船津弘子さんへの返済が終わった1年3ヶ月後だが、私の預金高は５００万円を超えていた。そこにマンションを担保に銀行から借りた５００万円が加わり、５００万円＋５００万円＝１０００万円。これがガリヤ創業資金の全てである。

しかし船津弘子さんの早トチリが無ければどうなっていただろう…その時はまるで無関係に思えるような出来事が物事をあるべき方向へと後押しすることを、今、不思議な思いで振り返っている。

冷に耐え苦に耐え…

人生とは経験、経験こそ人生と心得ている。しかし求めて得る経験より求めずして得る経験のほうが格段に多い。求めずともアッチからコッチから、勝手にやって来てくれる。よって基本は[受け身]だ。ポジティヴとかネガティブとかはせいぜいその先にある二次的なものだろう。

ちなみに、

「ガリヤ設立のきっかけは?」

――流されただけ――

私の常套句だった。

腰掛けアルバイトのつもりが流され流され、フト気がつくとシンドイ経営者をやっていただけだ。

猫たちはそんな私のまさに心のよりどころだった。どんな時の私も丸ごと受け入れてくれて、あの手この手で癒してくれた…そんな素晴らしい家族と出逢えただけで、この人生には深く感謝している。

よりどころならヒトも居た。性別♂。会社創業の報告をすると一ヶ月ほどして小箱が届いた。ペンダントだった。

しかしペンダントトップにギョッとした。細かな文字がギッシリ刻まれている。

冷に耐え苦に耐え煩に耐え閑に耐え
激せず騒がず競わず従わず
以って大事をなすべし

映画八甲田山に関わった人物だが、その撮影時において豪雪の中でひどく気持ちの塞ぐ状況に陥ったとか。そしてこの言葉（孟子）と出会い、救われたとのこと。

身に付けるしか用途がなく肌身離さずつけてきたが、あれから様々な出来事に押し潰されながらもギブアップしなかったことについて言えば、その影響は少なからずあったのだろう。

しかしこの贈り主ときたら、豪雪の中に私を叩きこんだまま２０１４年晩秋、他界。

――大事って、何のこと？――

答はまだ、見つかっていない。

去り行く仲間たち

創業の喧噪を一段落させた戦士たちは、カタバミの種が実から弾け飛ぶような勢いで新たな戦いへと飛び散っていった。その一粒目が野村さんだ。

「すみません…落ちたと思ってたんですが受かってしまいました…すみません！」

――…受かった？！――

遡ること約二ヶ月、これはエルフでの面接風景だ。

――貴女は建築士でしょ？――

「はい…二級です…一級の試験は受けたんですが…」

――発表は未だでしょ？――

「落ちますから」

――合格したらどうするんですか？――

「絶対に落ちます！」

――合格するかもしれないでしょ？――

「いいえ絶対落ちます！建築士は諦めました、もう未練はありませんー

――絶対ですね！なら採用です。いつから来てくれますか？――

「来週月曜日からお願いします！」

悲報は年明け早々だった。

「…受かってしまいました…」
――…いつまで…居てくれますか？――
「3月いっぱいで…」
ガッカリはしたが、めでたかった。

二粒目はTさんだ。カメラマンさんとの道ならぬ恋だった。ガリヤはそれで優秀な社員一名、人気カメラマン一名、個人的には猫トモ一名を失った。
だが、あの時授かった小さな命もとうに成人。どんな大人になっているだろう…。

三粒目は木下さんだ。外注業者さんとのデキちゃった婚もとい、さずかり婚によるハッピーリタイアだった。しかし、
「幸せにね～」
と涙ウルウルのガリヤ側に反し、婿さん側ときたら、
「やっとお前も一人前だ～っ！今後の仕事に期待してるぞ～っ！」
この胴上げせんばかりの盛り上がりに、
――理不尽！――

結婚で破壊される女のキャリア、結婚で強化される男のキャリア。
社員の披露宴には数えきれないほど出席してきたが、たぶん新婦の父親より孤独だった。

フリーペーパー全国制覇

意外にも私たちの仕事は、他都市からの来訪者たちをビックリさせていたらしい。
「福岡では、こんなぶ厚い本がタダで配られている！いったいどういうことだ？！」
…と。
やがて、
「お話を伺いたい」
と問合せてくる会社が後を絶たなくなった。九州だけでも宮崎県から2社、鹿児島県から2社、佐賀県から2社、長崎県から2社、熊本県から2社…と申し合わせたように各県各2社づつ、バラバラパラパラやって来た。
手土産の地産菓子に気を良くしながら、お茶付きで無料レクチャーを繰り返した。
――頑張ってください！――
心からそう願い、
「不明なところがあれば電話してください！」
惜しげなくフォローもした。

或る時、テレビでフリーペーパーが特集されているのをチラッと観ていてビックリした。日本全国で2千種ものフリーペーパーが発刊されているとのナレーションだ。
不思議だった。

――仲間たちを解雇させたくない！きちんと給料を払えるようになりたい！――

その一心でやってきただけのことが、いつの間にか日本中に広がり、これほどまで大きな雇用を生み出していた。しかも様々な業界が支社、支店、フランチャイズなどグローバルな展開を目指す中、そんなしんどいことが労せずして勝手に出来上がっていた。

「広告ばかりで読むところが無い！」

「いつまでこんな恥ずかしいことをやっているつもりですか？！」

ガリヤになってからも世間の批判は止まなかったが、おかげをもってかそれも、終息していた。

しかしひとつだけ、悔いもある。

去る者あれば来る者あり

去る者あれば来る者あり。幸か不幸か、来るほうの勢いも勝っていたガリヤは創業二年にしてほぼ代替わりしていた。山本清子さんに欠勤が目立つようになったのはその頃だった。長所であったはずの繊細な感性が、未成熟な組織に空回りを始めていた。

――独立していいですよ。貴女にはその力が充分あります！貴女の能力はガリヤを出たほうが発揮できます。仕事はこちらからお願いします。これからは外から私たちを支えてください！――

再三再四、話し合った末での結論だった。

なにしろ彼女のアパートは部屋というよりデザイン事務所。道具揃え一つをとっても、どこの事務所にも引けを取らなかった。場所も天神界隈という願ってもない立地。高校時代から絵本を出版するなど特異な才能に恵まれていたことや制作畑ながら営業にも積極的。広告主たちの信頼も厚く、自立するにはベストなタイミングに思えた。

ところが、独立早々に電話が入った。

「『長澤社長と是非お話させていただきたい』とおっしゃる方がおられるんです。急で申し訳ないんですが…今夜お時間頂けませんでしょうか？」

他ならぬ清子さんの頼みだ、二つ返事で引き受けた。場所は西中洲の料亭、春駒だったと記憶する。

清子さんのナッセ

「お待ちしておりました！」
部屋に通されるや男性の声が迎えた。その横に、神妙な表情の清子さんが居た。
「実は、うちの会社も今度フリーペーパーを発行することになりまして…」
挨拶が済むなり用件を切りだされた。
「いや福岡ではありません、熊本です！それで山本さんに何とか編集長として来て頂きたいとお願いしているんですが『長澤社長から許しを得てください。許しが無ければ行かない！』とおっしゃいまして…そこで長澤社長には是非ともお許しお願いしたいと、こうして一席設けさせていただきました！」
すでに熊本以外にも展開を考えておられたらしく、
「そりゃあガリヤのノウハウをソックリ全部いただくということになりますからね、福岡でだけは絶対にいたしません！これだけは、固く固くお約束いたします！」
…清子さんの気持ちが計りかねた。せっかく独立できたのにどうして？しかも行き先は熊本？福岡で築いてきた人脈や信用という財産を捨ててまで？そもそも引っ越すにしても普通の女性とはわけが違う。膨大な制作道具は大型トラックでも積みきれない。個人分と事務所分のダブルの負荷だ。
――熊本に行くとなると、引っ越しだけでも大変なんですが…――
ようやく口を開いた私に、
「そういうのはマッタクご心配には及びません！引っ越し代は当然ですが、マンションの敷金も家賃も、全部こちらで持たせていただきます！」
話はもう、そこまで進んでいた…。

――…わかりました…では…清子さんを…よろしくお願いいたします…――
清子さんは終始伏し目がちに鍋の火加減をみたりお酒をみたりと、他人ごとのような気遣いを見せていた…。

やがて熊本に移った清子さんから創刊号が送られてきた。誌名は［ナッセ　NaSSE］。土地勘も無くツテも無しの創刊が、いったいどれほど大変だったことか…さっそく電話を入れた。
――大変だったね、清子さん、よく頑張ったね！――
「ありがとうございます！ナッセっていうのはですね、熊本弁で『しなさい』っていう意味なんですよ」
その声が得意気に弾んでいた。

緊急電話

それからどれほど経っただろう…。
「山本編集長がマンションに閉じこもって出社しません！長澤社長、すぐ熊本に来て、山本さんを何とかしてください！」
すがるような電話はナッセからだった。
――山本さんがどうしたんですか？何があったんですか？！――
「…判りません…」
とるものもとりあえず熊本に向かった。着くとまずナッセに立ち寄った。対応のスタッフに理由を尋

ねるも口を濁すばかり…ピンと来た。繊細な感性が、ここでもまた、空回りを始めていた…。
彼女はたぶん鬱だった。今なら心の風邪として理解され護られもするが、当時の理解はそこまでに至らず、むしろコマッタちゃんのワガママとして処理される傾向にあった。

ナッセからのSOSはその後も続いたが、やがて退職したとの電話が清子さんから入った。
——じゃ福岡に帰ってくるんだね、よかったぁ！で、いつ帰って来るの？——
どれほどホッとしたことか。ところがだ。
「いいえ」
聞き違いだろうと、
——で、いつ帰って来るの？——
「…帰れません」
——…どうして？！——
「…どうしても…」
——どういうこと？——
さっぱり要領を得ない。
——ナッセ、辞めたんでしょ？帰れるでしょ？早く帰っておいで！——
「帰れません」
——あ…そっちで仕事もう見つけちゃった？——
「…いえ…」

――東京に出るとか？――
「いいえ」
――なら早く帰っておいで！仕事はいっぱいあるんだから！待ってるんだから！――
「…帰れませんので」
――どうして帰れないの？私に話せない理由でもあるの？――
「…福岡に…戻るのに…引越し代が…」
どうにか重い口を開かせることができた。
「…荷物の運搬だけで…６０万以上かかります。いま社長に…『払ってください』ってお願いしてるところです…」
――なんだ引越し代か！引越し代くらい私が用意するわよ！――
ところがだ。
「いいです」
――いいって…返済なら心配しなくていいんだよ。いつか返せるようになったら、少しづつ返してくれればいいんだからね。とにかく早く帰っておいで――
「いいです！」
――どうしたの清子さん？！――
「……」
――どうしたの？ちゃんと話しなさいよ！――
そして、感情のダムが決壊した。

「おかしいですよ！おかしいですよ！『引越し代も部屋代も全部出すから是非来てください！』って、私、そう言われたから熊本に行ったんですよ！だから福岡に帰る時のお金だって、出してくれるのがあたりまえじゃないですか！絶対に絶対に、おかしいですよ！」

――そ…そうね、そうね、おかしいね、でもそれ、きちんと社長さんに言った？――

「言いました！」

――出していただけそうなの？――

「頑張ります！」

――だいじょうぶなの？――

「だいじょうぶです。頑張ります！」

――じゃ、社長さんが引越し代を払ってくれるまで、熊本に居座るつもり？――

「はい。きちんと引越代を払っていただくまでは、福岡には絶対に帰りません！」

それがどれほどバカでソンなことかと、どう説得しても清子さんは譲らない。熊本に居続けることでダメージを被るのは清子さん自身であり、そのクリエイティブな才能に他ならなかった。

しかし、これが清子さんの〈筋〉だった。

ナッセの社長さんとしては、彼女には充分過ぎるほどの出費をしたと考えたのだろう。期待が大きかっただけに、わけのわからん引き篭もりを繰り返されてはむしろ損害さえ被った思いだろう。しかしそこを百歩譲っても、彼女は求人誌で応募した社員ではなかった。ましてや福岡という土壌に張りめぐ

らせた根を、引き抜いてまでの誘いだったのだ。相応の責任を果たしたのだろうか？

しかし思うに、彼女があれほどまでこだわった引越し代とは、失った誇りや夢に向けた必死の叫びではなかったのか。またエルフを愛したようにガリヤを愛したように、否、それ以上にナッセを愛していたのでは…もしや引っ越し代だけの問題ではなかったのでは…。

訃報

それからしばらくして、熊本で職を見つけたとの電話が入った。上司を伴って挨拶に現れたが、クリエイティブとはかけ離れた業種であることが気になった。

――次は、ゆっくりごはん食べようね！――

「はいっ！またちょくちょく出て来ますね！」

――絶対だよ！！――

「はいっ！」

笑って約束したくせに、次は無かった。

「山本さんが亡くなりました」

連絡は、ナッセからだった。

カーニバルクラブでの弾けるような日々、けっして手を抜かない丁寧な仕事ぶり、ガリヤ創刊を支えた手作りのリバーサライト、ビル火災をくいとめた夜のこと…あんなに頼もしかった人がいったいどうして？

寒かったんだね…寒くて寒くて寒くて、心の風邪、うっかりこじらせてしまったんだね。

清子さんのナッセはその後、北九州ナッセ、大阪ナッセ…と展開しながらどういうわけか福岡だけは、違う名前で創刊された。

それにしても、

「『福岡では絶対に出しません！』と固くお約束したんですが、会社の方針で反故にさせていただきます。すみません！」

くらいあるのが、人としては［筋］なんだけどなあ。

筋ってやっぱり大事だよね、清子さん！

つづく（続きは6月12日）